
運命の人

櫻塚森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の人

【Nコード】

N4340T

【作者名】

櫻塚森

【あらすじ】

目指すはヴィクトリアン！！運命の人を求める貴族の若様と愛されちゃってる乙女の戸惑いの物語です。時代考証一切無視。架空イギリスの昔話だと思ってください。サイトにUPしていたお話をこちらへ転記していきます。

馬車は走る（前書き）

架空イギリスの昔話。作者の都合の良いように話は進んでいきます。主人公達の名前はいろんなどころで使いまわしされてますが、パラルワールドなんだと想像していただければ幸いです。

馬車は走る

柔らかい土の道から石畳へ、2頭だての馬車が走っていた。馬を急がせる者の心は一陣の風となつて通り過ぎていく。

「まあ、あれは・・・？」

ゆつたりと馬車に乗りピクニックにでも来ていたのだろう、年頃の娘と馬車に乗った貴婦人がはしたないと分かつていながらも通り過ぎていく馬車を身体で追つた。

声を掛ける間もなく通り過ぎていく馬車にため息を漏らす。

「お母様、どうなさつたの？」

萌黄色のドレスを見に纏つた娘が尋ねると貴婦人はうつとりとした顔になつた。

「あの紋章、ちらつとしか見えなかつたけど、中に居られた方の輝くばかりの銀の髪。間違いないわ。アンジェリーナ、あなたの結婚相手に相応しいとお父様と私も思っている方が、今隣を駆けていったのです。」

あの速さで通りぬけた馬車の中に居た人を見分けた母に娘は感心してしまつた。

「まあ、どなたですの？」

箱入り娘でいられている我が娘は、美しい。

誰もがデビュタントを待ち望んでいることだろう。きっと女王陛下も気に入つてくださるに違いない。

娘が首を上げてその方向を見たが、すでに馬車は見えなくなつていった。

「けれど、お母様、そのような方が私達の馬車に挨拶もなく通り過ぎていくなんて、失礼じゃありませんこと？」

貴婦人は軽やかに笑つた。

この親子は、貴族という階級に位置する位に身をおいていた。

「あの方は、特別な方。現在も、そして未来においても我が女王陛下にとつて、この英国を支えていく方ですもの、許されるわ。」
我が伯爵家よりも位が上のものといえば、公爵家以上となるが、それでも挨拶をしていくのが普通ではないかと娘は思った。

「お前のデビュタントには、ぜひあの方をパートナーにと考えているのよ、アンジェリーナ。ライバルも多いし、問題はあるのだけれど、お父様の力も借りて、何とか、あの方をお前のパートナーにしてみせますわ。」

今年のシーズンに女王陛下に謁見を控えたアンジェリーナはまだ見ぬパートナーに期待と不安を寄せていた。

彼は、その馬車が伯爵家のモノと分かっていた。
けれど、それ以上に急ぐ理由があったのだ。

時計は、もう直ぐ正午をさしている。
連絡が入ったのはその日の朝早くで、その連絡を得るや否や彼は馬に飛び乗った。

昨日は、領土の1つを視察するために、タウンハウスを離れ、馬車なら2日かかるところまで出かけていたのだ。

しかし、その領土で朝食を取る間もなく彼は馬を走らせて帰って来た。

そんなにも急がなくてもいいだろうと彼に仕える者達は言ったが、彼には一刻も早くこちらに帰って来る事が必要だった。

彼に命令できるのは王族と父親だけである。
それほどの彼が自分の仕事を無視してでも駆けつけたい相手がいるというのだ。

ロンドンから遠く離れた領土で彼に仕えている者達は、
その相手こそ、若主人が昔から追い求めていた存在に違いないと確信していた。

若主人は、女性にとんでもなくモテる。

父親の公爵閣下もそれはもつ、とんでもなくモテたが、公爵夫人の美貌も引き継いでいると言われていた。

親しくしている友人を交えたら、その場に花が咲くほどの色男だ。

流れるような銀の髪に、エメラルドを思わせる緑の瞳。

人は彼を“銀の貴公子”と呼び、尊敬の念を寄せていた。

つづく

対面

ロンドンにある住居に帰るには、馬を走らせても5時間以上掛かる。しかも、ロンドンの石畳の上を馬で走らせるのは、馬にとって酷なもので、市街地に入る前に馬車へと乗り換える作業もあつた。

御者も予定よりも早く馬車の用意をしなければならぬことに焦りをみせたが、

主人のいつも以上に興奮しているような表情にとにかく早く屋敷へもどらさねばと思つていたのであつた。

「すまないね、急がせて。」

詫びる主人に御者は首を振る。

「いえ、いえ、ライモンさま、ようやくでございますか？」

御者の言葉に主人は思いをかみ締めるように言った。

「ああ、やつとだ。」

馬車の音を聞きつけタウンハウスの者は慌てふためいた。

「ライモンさまが、帰つてこられたぞ！」

執事の一声で皆に緊張が走つた。

今日、この日に彼が帰つてくることを知つていた執事は、彼の父親の命でこのタウンハウスに3日前から来ていたので。

普段、タウンハウスを管理している者にあれやこれやと注文をつけて、直すべき事を直させた。

若き主人に仕えているのは自分の息子であるが、経験が浅く、まだまだだという思いがある。

そのためにタウンハウスへとやってきたのだ。

大きな扉を開けると仰々しく頭を下げた従者やメイド。

「お帰りなさいませ、ライモンさま。」

慌てて駆け寄つてきた執事は緩やかにウェーブの掛かった白髪を後ろに撫で付けていた、

一糸乱れぬその姿で、主人の渡した帽子やコートを受け取っていく。
「彼女は・・・？」

「客間にございます・・・しかし、ライモンさま・・・まことなのでしょうか・・・。」

玄関のエントランスの正面にある階段は、歩くと沈みそうになる濃紺の絨毯が彼の足を包む。

「それは、私が一番確かめたいことだよ、ジェイクス。イザークと共に祈ってくれ・・・彼女であることを。」

階段を上がりきったところで、2人の男が主人に付き従うのを止めて立ち止り、声を揃えた。

「イエス・マイ・ロード。」

彼の手は震えていた。

この扉の向こうに彼女がいるのだ。

メイドが磨き上げたであろうドアの取っ手を持ちながらノックをする。

「・・・はい、」

想像していたよりもか細い声だと思った。

「失礼。」

ドアを開けた彼の姿を見た彼女は既に立って深い礼をしていた。

「は、初めまして、ハウメル侯爵・・・わ、私は、こ、このた、度！」

彼女は自分を包み込んでいる存在に身体を硬くした。

「逢いたかった！」

そう耳元で囁く声に囚われたような感覚だった。

頬に添えられた大きな手が自分の顔を上に上げる。

「・・・。」

ファーストネームを呼ばれた訳でもないのに心が騒いだ。

緑色した輝く瞳に映っているのが自分であることに娘は不思議な感

覚を覚えていたが、

近付いてきた顔にハツとなり、その顔をグイツと押し戻した。

「な、なになさるんですかっ!」

気が付いたときには彼女の平手が彼の頬を叩いていた。

彼と彼女の身体が離れた。

1歩お互いに下がる。

そして、彼が顔を伏せて震えているのを見た彼女は、改めてこのを大きさに気付いた。

貴族の称号を持つ彼の頬を思いつきり叩いたのだ。

中流階級社会出の自分ごときが口答えばかりか、頬をはたいたのだ。

「あわわっ…。」

これから彼は自分にとって雇い主となるはずだった。

自分に与えられた最後のチャンス。

彼女の中で描いていた未来が過去になつていくのを感じた。

「はっ!」

うろたえている彼女の目の前で若き侯爵は笑い出した。

赤くなつた頬を撫でながら。

「あ・・・あの・・・。」

笑い声の響く客室。

彼の揺れる銀髪がだんだんと小刻みになつていく。

あまりにも豪快に笑うその声に彼女の方は呆然とし、思い出せば、

自分は恥ずかしい目にあつたのだと腹が立つてきた。

終息気味であつたが、笑い続ける彼を見ながらソファの横に置いて

あつた鞆を手にとつた。

「失礼しました。」

自分には縁のない仕事だつたのだと。

彼の横を通り過ぎようとして手をつかまれた。

「えっ?」

「ようこそ、ミス・カームニィ。お待ちしております。」

目の前には銀髪に緑の瞳を持つ若き侯爵。

そして、彼女は対照的な漆黒の髪と金色の瞳を持っていた。

つづく

孤独な娘

自分には縁がなかったのだと彼女はそこから出て行くこととした。何せ王族の血を引くとまで言われているシルヴァリー公爵家の次期後継者であり、現在はハウメル侯爵を名乗っている人をひっぱっていたのだ。

相手が失礼な事をしたと分かっているにもかかわらずこの世界には身分というモノがある。

文句など言うだけで自分の未来など簡単に閉ざされてしまうのだ。それなのに……。

彼女は出された食事を前に呆然としていた。

（雇われたのかな？）

しかし、使用人と主人は一緒のテーブルになどつかないはずだ。

「クレア……先生に挨拶は？」

目の前には、同じように食事を前に固まっている少女。

「は、はじめまして……。」

銀色に輝く髪と緑の瞳は兄である彼と同じなのだと思った。

「はじめまして、クレア……。って、あの侯爵？」

「なんだい？」

「私は、その雇ってもらえるということでもいいんですか？」

彼の瞳が細まり、その微笑がとても優しいものだったことに彼女は少々慌てて視線を逸らしてしまった。

「そうだよ、ミス……。いや、今この時から君のことは、ディアナと呼ばせてもらうよ。」

地味な自分に似合わない派手な名前だと幼い頃から好きじゃなかった。

「月の女神に相応しい見事なブルネットの髪に金の瞳だね。」

その髪も瞳の色も家族には、受け入れられず、母の不義の子などとも言われ、一時は夫婦仲も最悪になった。

しかし、間に入った祖母のお陰でディアナは住む場所を失わずにすんだ。
彼女は少しでも認めてもらいたくて、褒めてもらいたくて頑張って勉強をしただけだったが、両親には受け入れてもらえなかった。

中流階級に生まれた彼女の家庭は、商売をしていて、見栄張りだった。

成金といってもいいほどの趣味は周囲の人を苦笑させていたが、妻に似て華やかな雰囲気を持つ長女のミリアを何とか良い家柄の、つまり上流家庭に嫁がせたがっていた。

ミリアと違い、自分と同じ黒髪に気味の悪い金色の瞳。

ディアナに関する父親の感想はこんなものだった。

その上、性格も服の趣味も妹のディアナは地味だった。

自然と彼の意識は姉の方にはばかり向いた。

ディアナは、それでも近寄ろうとしない父親に振り向いてほしかった。

そのためにはどうすればいいのか考え、祖母の進めもあり本を読み漁り、勉学に勤しんだ。

祖母は有名な作家だった。

その作品は女王陛下の耳にも入り、女男爵の地位を得た人である。

女性にも知識や教養は必要だと考える祖母と父は馬が合わず、よく言い争っていた。

祖母は父の家に来るたび、ディアナがとても辛く当たられていることを見抜いていたのでよく自分の家に招いたり、勉強を見たりした。仮にも男爵の位を女王陛下から賜った祖母である。

ディアナの父も母、そして姉も本当は、彼女に取り入りたかったのだが、祖母はディアナ以外はあまり相手にしなかった。

祖母の言うように、せめて自分の得意な分野で自分と言うもの確立しようと頑張ってきたが、勉強はできても地味で誰からも声など

かからないであろう彼女の存在は、父親にとっては何の戦力にならないものだった。

ましてや、祖母の彼女への可愛がり方を見ると腹立たしく、父は段々とディアナを無視するようになった。

「家族だと？お前は居候だよ。淋しいと言つのなら婆さんのところに行くがいい。可愛がってもらえるだろうよ。」

何回もそう言われた。

母親はそれなりにディアナに優しくだったが、父親に逆らえるほどの女性ではなく、彼の前ではディアナを庇うこともしてはくれなかった。

どうしてそこまで嫌われなくてはならないのか。

ディアナは何度も考えたが、その疑問は解決できないままであった。

ある時、父親はディアナを祖母が娘として育ててはどうかと言ってきた。

「俺たちの娘の家族にいるより、母さんの娘の方がディアナも幸せだと思ふんだ。」

その提案に祖母はため息をもらした。

1人立ちもできない12のディアナを金に困っている訳でもないのに養子に出すそう考えた息子に呆れたのだ。

「お前は何故、この子をそんなに嫌うのかい。」

ディアナの頭のよさ、勘の鋭さ、全てが祖母の生き写しのように思えて、父親は彼女がいるだけで息苦しかったのだ。

祖母は、前向きに考えると言いながら、常識的に考えても普通の家庭のすることではないと、せめてディアナが16になるまで、待ちなさいと言ったが、父親は、それなら、とある金持ちが若い娘を嫁に欲しいと欲していたので、そこに嫁げと言ってきた。

父親がディアナの相手として選んだ男は、父親よりも年配で、それにはさすがの母親も、祖母も反対をし、その縁談は流れた。

「わしの望むことには、何でも反対するのだろう、母さんは！」

そう言つてまた口論となる。

父親はその件からますますディアナを相手にしなくなつたが、遠く離れた祖母宅よりもロンドンにいる方が勉強には適していると同じ家で暮らすことは許された。

しかし、年老いた醜男のもとにすら嫁げなかつた娘など、同じ苗字を名乗らせることもイヤだと言い、

ディアナは事実上、祖母の家の娘となつた。

親子の縁など切れたはずなのに、この時代の女にとって勉強など意味がないと考えていた父親は、家の事に口出しをしないという約束で彼女の向上心に対して口をはさまなかつた。

ディアナは孤独ではあつたが学ぶ事に喜びを見出し、家庭教師という職業に就いた。

この時代、家庭教師は女性が就くことのできる数少ない認められた職業だつた。

1人で生きていくためには、自らが行動を起こさなければならぬと考へていたディアナは、祖母の死をきっかけに家庭教師を斡旋している事務所に自分を売り込み、できれば家を出るために住み込みの仕事を得たいと思つていた。

そんな彼女に両親が仕事を持つてきたのだつた。

つづく

振ってきたチャンス

父の思惑

普段寄り付きもしない娘の部屋に父親はノックもせずに入ってきた。その様子に怪訝な表情を見せたディアナに一瞬顔を引きつらせた父親であったが、

彼は一つ咳払いをすると自慢気に語りだした。

「ディアナ！シルヴァリー公爵令嬢が家庭教師を探しているというんだ。」

名前だけでもと父のつけた名前は彼女のコンプレックスとなった。

「頭のいい、できれば穏やか家庭教師を探しているというんだ！お前に打ってつけの仕事じゃないか？」

父親は自分の娘こそ相応しいと売り込んだ。

相手は、家庭教師に対しての形容として、“月のような”という言葉葉を述べてきた。

それに対しては意味不明だと思ったが、髪は黒髪、瞳の色は金色と指定までされていた。兎に角、静かで、芯はあるもの的大人しい女性の家庭教師を探しているということを馴染みのサロンで聞きつけた。

ましてやディアナは“月の女神”の名だ。

この話がまとまれば、彼には上流社会への伝ができる。

ディアナは頭もよく、人に教えるのが上手で、その上、大人しいと彼は自慢しまくった。

「しかし、ジャンセン。君の娘と月に何の関係が？たしか、君の娘は金髪だろう？」

シルヴァリー公爵家と懇意になりたい者は沢山いた。

「はは、それはわが自慢の娘ミリアのことだ。私が言っているのは、母の強い希望で養女にだした次女のことだよ。」

父親の脳裏に浮かぶのは明るい将来だった。

なぜならば、爵位だけでなく、シルヴァリー公爵家は事業にも積極的に成功を収めていたからだ。

その成功は、彼、ライモンの代で著明となり、彼と協力している3つの貴族は、すでに貴族社会では特別な存在となっていた。

シルヴァリー公爵家・クラインハイヴ侯爵家・イシューバル伯爵家・アッテンボロー伯爵家。

この四つの貴族はこの時代の英国を支えていた。

「公爵家なんて・・・無理よ、お父様・・・。」
ぼそりと言った言葉。

その言葉に父親は激怒した。

先ほどもまでの上機嫌な顔は何処にいったのか、ディアナを見る目はどこまでも冷たいものだった。

「勉強ばかりして役立たずのディアナ。お前は、ミリアのために何かしたいとは思わんのかっ！」

父親は、ディアナが公爵家との縁を持つ事で、姉のミリアと貴族との間にも縁が持てると思ったのだ。

運よくば公爵家の嫡男と、それがあまりにも高望みというのであれば、

別の貴族の息子の元に嫁がせて上流階級へと行きたいと考えているのだった。

「いいか、公爵家の跡取りと姉さんを近付けるんだ。それができたなら、お前をこの家の娘として認め、自由にしてやるう。」

自由。

今も対して不自由ではないわ、それに家の名前なんて、もうどうでもいい。

そう口を開こうとしてつぐんだ。

自分に興味などない親。

ディアナは、いつか振り向いてもらおうとはしなくなっていた。

U
U
U
U

女王陛下の勅命

家の事をぼんやりと考えていたディアナは自分に向けられた言葉にハツとした。

「もちろん、君以上にクレアの師となってくれる女性はいないだろう。」

家庭教師としてこの家で暮らせるということだった。

「君の部屋も用意してある。」

住み込みでの注文だった。

その申し出はディアナにとても喜ぶべき事だった。

「あ、ありがとうございます。」

ディアナは彼の視線を戸惑いながら受け流していた。

「お兄様……。」

そんな彼に妹が声を掛けた。

「なんだい？」

「ディアナ先生は、私のお姉さまになるの？」

食事中だと言うのに、はしたなく噴出しそうになってしまった。

「なっ、」

ディアナが何かを言おうとするのを止める侯爵。

「誰がそんなことを？」

「ジェイキンスもイザークもそう言っていたわ。だってお兄さまは、私くらいの年の時から、未来のお嫁様を決めていて、それは女王陛下もお許しになっていたのでしょっ？」

ディアナには何が何やら、貴族社会はよく分からないことだらけだった。

それは、有名な話。

王族とゆかりのあるシルヴァリー公爵家がヴァキングム宮殿を訪れ、

女王陛下の拝謁を賜った折、女王陛下は幼いライモンの聡明さに強く興味を抱いた。

「ライモン、将来は私のよき右腕となり働くか？」

幼いライモンを腕に抱いたまま尋ねた陛下にライモンは、幼いながら“仰せのままに”との返事をした。

「では、ライモン。お前にはよき妻を捜してやろう。」

女王陛下の申し出に幼いライモンは驚くばかりの返事をした。

「それには及びません。」

驚いたのはライモンの両親である公爵夫妻だった。

女王陛下の弟君であるシルヴァリー公爵は、人徳があり、商才に長けていたため、その代でかなりの財をなした。

女王陛下にも率直に意見を言える数少ない臣下でもある。

とは言え、自分の息子がこうもハッキリ陛下の申し出を断ると思つていなかった。

「ほう、私の選んだものでは不満か？」

試すような視線で甥っ子を見る陛下に、ライモンは一切臆することなく微笑んだ。

「いいえ、女王陛下。私には、すでに運命の月の女神がいるのです。その女神と添い遂げられなくてはきっと私は死んでしまうんです。」

5歳児の言葉である。

公爵夫妻は、ライモンの言葉に付け足した。

まだ夫人のお腹に彼が居る頃、1人の占い師が屋敷を訪ねてきた。旅の途中で行き倒れたところを公爵家の小作人が世話をした。

占い師だと名のる老婆は、小作人の過去をズバリと言い当て、次に何をすれば主人の目に留まりもつと良い暮らしが出来るのかを助言した。

小作人は、占い師の言う通りの行動を起こし、シルヴァリー公爵はいたく彼を気に入った。

元々の頭の良さも買われ彼は厩舎の責任者まで成り上がった。

親しくなってくると気さくな公爵は未だに住まいを貸している占い

師のことを聞きつけ、今度生まれてくる子供について聞いてみることにした。

その占い師は、生まれてくるのは男の子で、この国の発展には欠かせない存在になるであろうと告げた。

見るからに怪しい占い師ではあったが、嬉しいことを言ってくれたと公爵夫妻は喜んだが、占い師は付け足した。

「しかし、月の加護のある乙女を娶らねば、生まれ来る子も大英帝国も衰退の一途をたどるであろう。」

月の加護？いぶかしげる夫妻に占い師は翌日、忽然と姿を消したのである。

「その話を聞いた我が乳母が、幼い頃より、息子に言い聞かせていたようで……。」

女王陛下の實の弟である公爵閣下は苦笑するばかりだが、当の本人はいたって真面目だった。

「本当です、女王陛下。私はいずれ月の加護のある乙女を手に入れて、この国の発展に助力したいのです。ですから、陛下のお言葉には従えません。」

周囲は凍りついたが、女王陛下はそのライモンの言葉が大層気に入り、今後一切ライモンの相手には、誰も口出しをしてはいけなさと命じたのだった。

万が一身分の低い者が相手であっても、後見人として自分になるとまで言つてのけたのだった。

「ん〜クレアはどう思う？」

優しい妹を見つめる瞳が綺麗だとディアナは思ったが、口を挟みたくても挟めない雰囲気だった。

「クレアは、お姉さまが欲しかったの。だから、嬉しい。」

可愛らしい花の蕾のような頬笑みにライモンは優しい笑顔を返した。そして、余計な口を挟んではいけない、これは貴族の戯れなのだと困惑しているディアナにも微笑んだ。

「どうする、ディアナ？クレアの言うように結婚しようか。」

「ええっ！」

今度は身体までもが硬直してしまった。

じっと自分を見つめる視線から眼を逸らせない。

(じよ、冗談だよな？悪ふざけ……。)

「手に入れた小鳥を手放すほど、私は甘くないよ……。ディアナ。考えの中、彼が何を言ったのか彼女には届いていなかった。」

つづく

妹君のお願いごと

ライモンは執事のイザークを呼んだ。

彼は直ぐにライモンの部屋を訪れた。

シルヴァリー家の執事長は、彼の父親であるが、イザークは彼専属だ。

「近々行われるパーティーで上品な顔ぶれが予想されるものを調べてくれ。」

主人が自らパーティーを探すなどは今までなかったことだ。

イザークは少し返事を遅らせていた。

「はい、かしこまりました。」

それを察したライモンが苦笑して答えた。

「やっと、ディアナが私のパートナーとなってもよいと言ってくれたのでね。彼女の気が変わらない内に決めてしまおうと思ったんだ。」

その言葉に執事は柔らかい笑顔を向けた。

「それはおめでとございます、お嬢様もようやく受け入れて下さったのでございますね。」

心からの言葉であることはライモンには分かっていた。

「まあクレアの泣きが入らなければ承諾してもらえたかは怪しいんですけどね。」

初めての生徒であるクレアリス・シルヴァリーは本当に愛らしい少女であった。

人見知りの性格にもかかわらず、ディアナとはあつという間に仲良くなった。

仲良くなった上に、兄がディアナに好意を示しているとわかった途端、頼もしい味方となってくれたのだ。

兄がどれだけ優しく、頼もしくて、ディアナのことが好きなのか。

クレアは以前母親の開いたパーティーでライモン目当ての御令嬢に取り囲まれたことがあった。

目に入れても痛くないと言われている妹の存在を誰もが熟知していて、ライモンの心を掴むには、クレアを攻略する必要があるともしばらの噂があったからだ。

元来人見知りの激しいクレアは、その令嬢達が怖かった。

それに比べ、その令嬢達と同じ年頃のディアナのなんて優しく、物知りで美しいのか。

以前兄が言っていた月の女神そのものだ。

深緑がかかった黒髪に金色の瞳。

それは、1人淋しく寝る夜を優しく包んでくれる月の光そのもの、つまり、彼女は月の女神。

月の女神と言うことは、兄上の運命の人。

クレアの中での決定事項だった。

大好きな兄のため、そして、自分のため、初対面の日に彼女を見て決意してしまつてから、何としても自分の“姉上さま”になって欲しくて頑張っている。

ただ妹としては、ライモンの仕事が忙しく、ディアナと話をする機会が少ないのを不満に思っていた。

「仕事だからって、ディアナお姉様を放っておいたら、痛い目に合うのはお兄様なんですからね。私がどれだけ努力してもお兄様が頑張らないとダメなんだからっ！」

ちよつと前までは自分に対して偉そうな口など叩かなかつた妹の成長。

それは、淋しくもあり、頼もしくもあつた。

「クレアはそんなにもディアナがいいのかい？」

「もちろんです。ディアナ姉様は、私をシルヴァリー侯爵令嬢ではなく、クレアリスとして、接してくださるもの。お兄様の妹というのでもなくね。そう言う方にこそ、お姉さまになってほしいの！」
今までの妹の苦勞を知らない兄ではなかつた。

「では、私もそろそろ本腰を入れるかな。」

「そう来なくっちゃ！」

嬉々として部屋を出て行く妹にライモンは嬉しい気持ちと先日のこととを思っただけ息をもらした。

つづく

侯爵さまの頭痛

それは、かの人が屋敷に来て一週間ほど経った頃だった。

ライモンは女王陛下から突然呼び出された。

時期から言ってそろそろ呼び出されてもおかしくないかなとは思っていたが、やはり陛下の情報網は掴むのが早いなと思った。

謁見の間ではなく、陛下の私室への案内と言うのが彼女の意図を示していた。

強引な彼女に流されないようにと心に念じながら彼は扉の前に立った。

「ハウメール侯爵閣下、御来室でございます。」

訪問を告げる声が廊下に響く。

返事があつて開かれた扉の向こうに陛下はお茶を用意して待っていた。

「待つてましたよ、ライモン。」

対面した女王陛下はいつもの威厳にまして何やら企んでいるような目つきで彼を見ていた。

目の前の席への着席を許されたライモンは、できるだけ笑顔を貼り付けて静かに腰を下ろした。

「今日の御用はなんでしょうか。」

彼はその笑みに気付かぬフリで女王陛下に笑いかけた。

「私の情報網を見くびってはなりませんよ、ライモン。」

「もちろん、そのような恐れおおいこと……、」

あくまでも笑顔を絶やさないライモンに女王陛下は、静かに語った。

「妹君に新しい家庭教師が来たそうですね。」

その一言は予想できていた。

「（やはり、きたか。）ええ、それが何か？」

2人とも表面上はニコニコしていた。

「今まで家庭教師は年配者だったのを、うら若き乙女に変えたそうですね。」

それまでの家庭教師の年齢まで…とライモンは考えた。

「…ええ。」

「はつきりおっしゃい、見つけたのでしょう？生涯只1人の人を。」
ライモンは心の中で舌打ちした。

彼女のことは、もう少し自分を受け入れてもらって、信頼してもらった上で社交会にデビューさせるつもりだったからだ。

「彼女を一週間後にはデビューさせ、私に合わせなさい。」
その言葉にライモンは苦笑した。

「無茶なことを。彼女は私の地位や名声にたじろいでいます。この間ようやく、共にお茶会程度のパーティーに出ても良いと返事をもらったばかりなのです。彼女には上品だが規模の小さいお茶会から徐々に慣れてもらおうと…。」

いいかけて女王陛下の表情にハツとした。

「余計なことを考えてませんか？」

静かに尋ねるライモンに女王はニコリと微笑んだ。
「どなたのお茶会に出るつもりなのかと思ったのです、大方の目星はつきますが…。」

女王陛下の前だと隠し事が難しい。

きつと愛しい彼女のためにライモンが厳選したお茶会が、誰の手によつて開かれるものなのか分かったのだろう。

「兎に角彼女と私のことは見守っていて下さい…今はまだ。」
余計なことはしてくるなど釘を刺したところで女王陛下は動くに違いない。

それほどにライモンは彼女のお気に入りなのだ。

ロンドンの一等地にあるシルヴァリー公爵家から1台の馬車が軽やかな足取りで門を出た。

白とグリーンのよそ行きのドレスに身を包んだ貴婦人は馬車に乗る前から上機嫌で、お付きの者もにこやかだ。

「ああ本当に、私がこの日をどれだけ楽しみをしていたか分かる？ ウェンデイ。」

公爵夫人の軽やかな足取りは屋敷全体のお祝いムードをしめしていた。

「ええ、分かっておりますとも！あの坊っチャマがようやく見つけられたのですもの、私も嬉しゅうございます。」

使用人からの信頼も厚い公爵一家。

彼らはライモンの相手がなかなか見つからないことにヤキモキしていたのだ。

「有難う、けれどライモンは何故直ぐに教えてくれなかったのかしら、イザークもウェンデイが追求しなければ言わなかったと思うのよ？ライモンが相手を見つけると言うことが我が公爵家にとって如何に大切なことか、あの子自身が分かっているでしょうに。」

首を傾げる女主人にウェンデイは苦笑した。

きつとライモンは、家が大騒ぎするのを知っていて、もう少しゆっくり愛を育みたかったのだらう。

猪突猛進の毛がある主を抑えるのは困難を極めることだから、恋人のイザークも敢えて自分には教えなかったのだ。

けれど、つい嬉しくてディアナの存在をウェンデイに話してしまっただ。

そこら辺がまだ甘いと父親には怒られそうだ。

（奥様のこんなに嬉しそうなお顔も久しぶりだわ。）

ウェンデイはウキウキしどうしの女主人を見てそう思った。

つづく

女神の戸惑い

（どうしてこんなことになってしまったのかしら。）

ディアナは1人考えていた。

ハウメール侯爵令嬢の家庭教師の職を見つけてくれたのが父親だったことも驚きだった彼女は、侯爵の屋敷で熱烈な歓迎を受けた時は自分と誰かを間違えてるのだと思い、慌てて帰ろうとした。

それを執事やその他、侯爵家の使用人の方々に止められ、あるところか、侯爵の部屋で待つように言われた。

屋敷の主人である侯爵に会わないことには話は進まないと言われ待つこと2時間。

余りにも時間がかかるので一度出直してきますと言おうとしたら、これまた全力で止められた。

（帰ってきた侯爵にはいきなり抱きつかれるし・・・。）

初めて目にした侯爵は、それは美しい人で、銀の貴公子と言われていると聞いた時は、恐ろしく納得した。

夕食を共にしたのも恐れ多いことだったが、その席で令嬢と会え、とりあえず、受け入れていただいたようでホッとしたディアナであったが、

「ディアナ先生は、私のお姉さまになるの？」

令嬢であるクレアのこの言葉には、硬直した。

それに乗って悩殺モノの笑顔を見せられた時は、気絶するかと思っただディアナ。

（お金持ちって分らないわね。）

「先生っ？」

可愛らしい声に我に返ると自分を見上げているクレアがそこにいた。クレアには、フランス語の書き取りをもらっていたのだと思出し、思考を切り替える。

「ごめんなさい、ちよっと考え事をしてしまったわ。」

そう言った彼女に小さな天使はにっこりと笑った。

「お兄様のこと考えていたんでしょ？」

凶星を言われて頬を赤くする。

「ち、違います。さ、その書き取ったものを声に出して読んでみて。」

口を可愛らしく尖らせるクレアにディアナはタジタジであった。

なついてくれるのは嬉しいが、当初、クレアは“お姉様”とディアナのことを呼び続け参ったのだ。

頼むから“先生”と呼んでくれと言ったが、勉強の時だけといわれ、勉強を離れたら、“お姉様”と呼んでいい？と言われた。

それも止めてくれというと、

「お兄様は、お姉様と結婚なさるつもりだから、今から慣れておくのはいいことでしょうか？」

と言ってきた。

とんでもないことだと否定して、この世の中には身分と言うものがあつてと語りだしたら、クスクスと笑われた。

「お兄様は、そういう煩わしいことは全て免除されてるのよ、お姉様。」

と言われ訳が分からなかった。

その理由を執事に聞いたディアナではあつたが、まさかライモンの運命の人が自分であるなどは決して思っていなかった。

ところが、ココ最近、毎日のように部屋に花が届くようになった。

忙しく働いているライモンからの贈り物で、ただただ恐れ多いことだった。

タダでさえ住む所と、仕事を与えてもらえているのだ。

ディアナが居なくなつた途端、祖母の古い家には父が家族で乗り込んできたと家政婦長が手紙を書いた。

恩のある祖母のことを思うと、あの親子とはちゃんと話をつけないといけないのだろう。

しかし、今更戻れないし、戻りたくもなかった。

父親からは、貴族との縁を作り、姉を少しでもいい家に嫁がせるための足がかりになれと言われた。

いつ、侯爵家のタウンハウスに姉を招待してくれるのだと言う催促の手紙が来たのは2日前だ。

そのための就職だと言うことを忘れたわけではないだろうと言う脅しも書いてあった。

父親がコレを貸しだと思っていることは明らかで、ディアナの悩みでもあった。

返事をしないと乗り込んでくる可能性もある。

そう思っていたある日、その最悪な訪問は現実のものとなった。

つづく

「若様……。」

重々しい口調で入ってきたのはライモン専属の執事イザーク。

まだ年若く、ライモンよりも1つ年下であるが、世の貴婦人の噂になるほど端正な顔立ちをしている。

仕事振りは、本家の執事をしている父親には敵わないが、小さい頃から一緒に育ったとも言えるライモンを敬愛しているため、彼に認めてもらおうと懸命になっっている姿が忠犬を想像させると評判であった。

ディアナのデビューとなるお茶会の選考に母親が名乗りを上げそうになったのを食い止めたのはついこの間である。

自分付きのウエンディを連れてタウンハウスに勢いよく現れた夫人は、勉強中の娘の部屋をいきなり訪れ、娘とその家庭教師を驚かせた。

「お母さまっ！」

美しいその女性は優雅としか言いようのない秀囲気で娘を抱きしめキスをすると家庭教師に向かってニコニコしていた。

ディアナは暫しその微笑に見とれていたが我に返り、儀礼にのっとた礼をした。

「まあ、まあ何て、何て……。」

よく分からないが口元を押さえた手が震えていた夫人の緑色の瞳はみるみる内に潤んできた。

「お母さまっしたら、感激しすぎですわ、確かにお姉さまは素敵ですもの。分かりますけど。」

少し拗ねたような苦笑を浮かべるクレアに夫人は興奮を隠しきれないという風に言った。

「だって、だってクレアっ！あのライモンのお相手なのよっ！」

ディアナがギョツとしたのは当然だった。

「ライモンが求めてやまなかつた理想の相手だというじゃない？」
話が見えないディアナは何と声をかけていいやら迷っていたが、美しい親子は本当に嬉しそうに跳ね回っている。

と、美しい母と娘がきゃっきゃしているところに青筋を立てながら笑顔でライモンが入ってきた。

「母上……。」

「ああ、ライモン！」

夫人はまた優雅に歩いて彼を抱きしめる。

「はいはい。分かりましたからクレアの勉強の邪魔はしないでください。」

「えー、もつとお話がしたいわ、あ、そうだわ、午後からのお茶会にいかがかしら、このことを知ったお友達もきつと喜んでくれるはず。」

ぎよつとなるディアナ。

ライモンが以前から自分を何処か高貴な方々のお茶会に誘っているのは知っていたが、まさか母親の公爵夫人のお茶会とは思って居なかった。

いきなりのお茶会が公爵夫人主催では、体が竦んでしまう。

「それは、またの機会に。さ、母上。邪魔者は消えましょう。」

興奮気味に母のことは気にするなどディアナに言ってライモンは彼女を抱きか抱えて部屋を出た。

「いきなり過ぎます。」

ライモンの執務室に通された夫人はしゅんとなっていた。

「だって、ライモンの気持ちを考えていたら、何時まで経っても紹介してくれないでしょう？」

流石母親。

自分の計画を邪魔されなくなかったライモンはやんわりと父親似の笑顔を見せ夫人を一瞬安心させると“これ以上の口出し不要、ディアナの行くお茶会は自分で選ぶ。”と約束させた。

「それにしても、ライモン？どうして貴方は彼女のことを好きなの？一目惚れなんて・・・、母には、貴方みたいな現実主義者が可笑しいと思うのよね。」

にっこりと微笑みを浮かべる母。

この微笑みで父は陥落したと聞く。

「その理由は、母上にはなく、彼女に話します。」

それをさらりと交わせるのもライモンならではのあった。

公爵夫人は口を尖らせて何かを言いたげだったが、これ以上逆らうとライモンは口を利いてくれないだろうと判断。

ウエンディと帰っていった。

「父上には、私の口から言いますので、暫くのご容赦を。」

そう付け加えることも忘れなかった。

つづく

ディアナ包囲網

「彼女を好きな理由か・・・。」
ふと記憶を辿る。

頭に浮かぶのはまだ幼い自分と彼女。

つい頬が緩んでしまうのを叱り、再び送られてきた招待状に目を通す。

自分にすら臆しているのに、公爵夫人などと言う人物のお茶会など彼女本来の聡明さや奥ゆかしさが隠れてしまう。

もう少し物怖じしないで出席できるお茶会はないかと送られてきた招待状を物色していたところに現れたのがイザークである。

「どうした？」

「ディアナさまのお父上と姉上さまが、お越しになりました。」
ライモンの手が止まる。

「そろそろ痺れを切らせたか。」

「そのようです。」

ゆっくりと大きな息を吐きながら立ち上がる。

「で、ディアナはどうしてる？」

「クレアさまが、お姉さまのドレスを選ぶのだと張り切っているのを必死で止めておられます。」

屋敷のムードメーカーであるクレアが彼女を迎えてからと言うもの実に明るく笑うようになった。

人見知りの激しいクレアは、これまでの家庭教師をことごとく撃退していた。

彼女に気に入られたというだけで、ディアナは公爵家に相応しい女性だといえる。

初対面の時こそ公爵令嬢らしく猫を被っていた妹だが、ディアナを気に入った途端“お姉さま”と呼び始めた。

焦った彼女の表情が可愛くて、ライモンも妹を諫めなかったという

か、もつと彼女に自分との仲を真剣に考えてくれと思っていた。クレアは暫くして自分の仕事が忙しすぎてディアナをほったらかしにしていることについて苦情を申し立ててきた。全く、可愛い妹だとライモンは思ったものである。

あの父親に感謝していることは、ディアナを連れてきてくれたことだけだった。

あの時の彼女がディアナであるを知ったのは、半年位前のことだ。ライモンは仕事終わりで寄った店で親友と話をしていた。カーテンで仕切られた個室。

左右に人が居るのは分かっていたが皆気にせず酒を飲める席。そのライモン達の席と隣にいたのがディアナの父親だった。

上流階級に入り込みたい彼は、このような貴族達の集まる夜のサロンの顔を出していた。

煩いのが隣に来たものだと感じたのは自分だけではなく、親友のジオンも感じていたことだった。

「うちの娘は、私に似ず美人でね、ぜひ良い縁があればと思っっているのだよ。」

「そんなに美人なのかい？」

「ああ、頭も良いし・・・皆を虜にする力があるんだ。」

仕事先でやんややんやと自分の娘の自慢をしているディアナの父親の会話を聞いていた。

「自分で言うほど怪しいものはないよね。」

ぼそりと自分にしか聞こえない声でジオンが言う。

父親はわざとらしく娘自慢をし、その話を聞いて会いたいといったきた貴族を見つけたいのだ。

結局のところは娘すら道具としか考えていないんだとライモンは苦笑した。

「ところで、あんたのところにももう1人娘がいるだろう？女男爵のところには養女に出した。」

もう1人の娘の自慢も始めるのかとため息を吐く。

静かに酒を飲みたかったのだが、と席を立つことも考えていた。

「ああ、アレは気味が悪い。その女男爵にそっくりな黒髪に金の目、顔を見るたびに小さい頃俺を叱り付ける女男爵を思い出して吐き気がするほどだ。」

黒髪に金の目。

それは、あの時に会った少女と同じもの。

ライモンは立ち去ろうとしていた親友に別れを告げもう少しココで飲むことにした。

「女男爵って、お前さんのお袋さんだろ？」

「お袋なんて優しいものじゃない。何がいいんだか知らんが、兄弟の中であの女はワシにだけ敵しかった。兄貴達が戦争で亡くなった後でさえ、俺に家督を継がせようとしない。」

自分の母親に対する不満ばかりを述べる。

「月の女神の名前じゃないか。」

娘の名前がディアナであることが分かった。

「少しでも器量がよくなるようにつけたが、やはり、あの髪と目の色では不気味なだけだ。妙に勉強だけはできるのが祖母さんのお気に召したのも気に入らない。」

「おい、おい・・・娘だろっ？」

「あんなのいらぬ。で、グロイスの旦那の嫁にしようとしたらこどもあるうちに家内まで止めやがった。」

グロイスは、好色で知られた資産家だ。

「そりゃ、奥さんの方が良識があるさ。あの男は少々変態だからな。」

娘の悪口を言い続ける男に対してライモンは、その娘があの子なのか確かめなければと思っていた。

暫くして彼女のことを調べ上げた。

調べるほどあの時の子だと思った。唯一の味方の祖母が亡くなり彼

女が再び両親の元で暮していることを知った。

あの話では、よい生活をしていないだろうことは用意に想像できた。彼女が家庭教師を始めたと言うことも分かったから餌を撒いた。そして、彼女の父親はそれに上手く乗ってくれたのだった。

つづく

悪徳親子

「先に私が会う。頃合を見てディアナをつれてきてくれ。」
静かにイザークが頭を下げた。

「どんなヤツらだ？」

イザークは口角を緩める。

「それはもう、ライモンさまのご想像通りのよく深きお顔をされて
おります。」

ライモンもにやりと笑う。

「そうか、恥知らずを相手にするのは、ストレス発散になる。」
軽い足取りでライモンは客室へと向かった。

「いつまで、待たせるつもりなのかしらっ！」

ディアナの姉、ミリアはイライラしながら扇子で自分の手の平を叩
いている。

来ている服はハウメール侯爵家を尋ねるのに相応しい流行の形をし
たドレスである。

ディアナとは違って、金色の髪に青い瞳のミリアは社交界で貴族階
級ではないがために齒がゆい思いをしてきたのだ。

誰よりも美しく、気品があると自負しているにも拘らず、よって来
るのは碌でもない男ばかり。

ディアナが公爵家と繋がりを持てたのなら、これからが自分の出番
だと思っていた。

父親は父親で商才があるのかないのか、一か八かの博打のような商
売に手を出し、経営は少々右肩下がりになっていた。

娘の今後のこともあり、何としても後見人を、事業の後押しをして
もらいたくて、ディアナを送り込んだ。

しかし、頼りにならない娘は、やはり、少々良い仕事先が見つかつ
ただけでは、恩に着ることなく自分だけ得をしようと思っ

だと感じていた。

実の娘でありながら、幼い頃から彼女がどうも気に入らなかったのは、自分に敵しい母親に似ていたからだ。

黒髪は自分譲りと言うよりは祖母譲りだと思いたかった。

女の癖に妙に頭がよかったのも許せなかった。

姉のミリアが愛嬌のある美人なら、ディアナは、本の虫。

可愛げのない事といったら。

ディアナを産んだ時、妻はその黒髪に悲鳴を上げた。

姑と折り合いの悪かった妻にとつて、ディアナは鬼門だったのだ。

夫婦の感情はそのまま姉へと移り、ディアナは家で一人ぼっちになった。

淋しさから勉強に逃げた。

勉強をしていると祖母が褒めてくれた。

『これからの世は、女も教養が必要です。今からしっかりと学びなさい。』

女男爵の地位を女王陛下から頂いた祖母はとても敵しいが家族に虐げられているディアナには優しくかった。

自分と嫁が不仲であるばかりに、この子を傷つけてしまったという負い目もあるが、素直で聡明な彼女のことを一人前のレディに教育したいと思うのは本心だった。

姉のミリアは外見ばかりに拘って中身がない。

同じように接しているても苛められてると錯覚し泣き喚くのだ。

母親がディアナを心から嫌っているわけではないことも知っている。夫が毛嫌いしている手前それに従っているにすぎない。

ディアナの結婚相手に恐ろしく年配の相手を選んできた時はさすがに意見を同じに反対したが、それでも息子がディアナを追い出したくて仕方がないと色々考えていることは分かっていたので、自分の方からディアナを養女に欲しいと言った。

息子は妻が渋い顔をしているのを分かりながら快諾し、押し付けら

れるようにディアナは祖母の屋敷にやってきたのだ。

父親に捨てられたと言う事実にはディアナが傷付かない訳はない。女男爵としての地位だけで彼女を守れるのは自分が生きている間だけ。

それまでになんとかして彼女の後見人を見つけないかと思つた。祖母であつた。

しかし、頭は悪いくせに金儲けのことだけは、その当時才のあつた息子は、裏から手を回しディアナの後見人になつてくれそうなる祖母の知り合いたちに資金援助をして、話は断るようにと申し合はせていた。

誰も後見人になつてくれないとなれば、母親はイヤイヤながら、息子に頼みにくるはずだ。

その際には、祖母の持つてゐるもの全てを奪つてやるつもりで息子はディアナを養女にやつた。

後見人が決まることなく祖母が他界し、屋敷には古くから彼女に使へていた者たちとディアナしか残つていなかった。

まだ成人していないディアナを父親が無理矢理引き取つたのは祖母の死から三日経つた時で、ディアナは、両親と姉の住む家で勉強しながら家政婦と同じように働いて、わずかな賃金を得ていた。

姉のミリアは、贅沢に身を染めて、ディアナをブスと謗り、お茶会や、夜会に出かける度にドレスを見せびらかせてきた。

一刻も早く自立したかつたディアナは祖母の知り合いの家庭教師婦会を訪ねて事情を話し、入会。

家の家事手伝い以外にも家庭教師としての仕事も得るようになった。祖母は遺産の名義をディアナにしていたが、この家を出るためなら父親に全部譲つてもいいとさえ思つていた時に、ハウメール侯爵家での家庭教師の話が降つて沸いてきたのだ。

お給金よりも何よりも住み込みでと言うところが家を出るチャンスだと考えた。

誠心誠意、侯爵令嬢に仕えていれば、その後の就職先も安定するだろうとも。

一般庶民である父親がどうやって、こんな話を仕入れてきたのか分からないがヤケに機嫌のいい彼の下心も見えて一瞬戸惑いもあった。けれど、結局は押し切られて侯爵家の門を叩いたのだが・・・。

まさか、公爵家の跡取りに冗談だろうが、求婚されるわ、生徒の妹にはお姉さまと呼ばれるわ、公爵夫人にも何やら誤解されているわ、戸惑うばかりであった。

つづく

悪徳親子（後書き）

次回、ライモンと悪徳親子対決。

膿を出す

目の前の椅子に腰掛ける若き侯爵にディアナの父とその娘であるミリアは息を飲んだ。

若造だと侮っていた父親は、ライモンの醸し出す威厳に気圧されていた。

一方、ミリアは輝くばかりの侯爵の容姿に見とれて声も出せずに居た。

「・・・で、用件は？」

問われてハツとなる。

「ああ、いや、その娘に逢いに来たのです。」

ライモンはフツと口角を上げる。

「娘とは・・・貴方の隣に居るお嬢さんのことですか？」

ライモンの言葉に父親は眉を寄せる。

「いや、ディアナのことです。」

「ディアナ・・・彼女は、貴方とは縁が切れているはずだ。」

パチンと指を鳴らすと側に仕えていたイザークがある書類を提出した。

「ここに、書いてありますよね。貴方はディアナを貴方の祖母に養女として差し出した際に、今後一切の金銭的援助はしないこと、身内としての縁は切ること、祖母殿との繋がりには保つがディアナとは関係はないとする。・・・と。」

ずっと昔、祖母に対して出した条件だった。

それほどまでに父親はディアナを嫌っていた。

「し、しかし、祖母が亡くなった後、私は・・・結局はディアナに住むところを与え、食事の世話もしていましたし、家族として暮しておりました。その文言は無効でしょう。」

引きつった笑いを見せる父親にライモンはさらに畳掛けた。

「家族ねえ・・・。」

その笑いに父親もミリアも冷や汗を流した。

「貴方のところに居た家政婦に聞きましたよ。貴方はディアナを家族としてではなく、使用人として住まわせていたそうですね。」
先日止めさせた家政婦。

あいつかと2人は顔を見合わせた。

「最低限の賃金で、屋根裏とも言える部屋に追いやっていた。娘としての縁は切ったが、世間体を考えて、家族だった女男爵を亡くした彼女を引き取ったんでしょ？」

どうしてそんな情報を知っているのか。

思わず立ち上がる父親と娘ミリア。

「彼女は貴方の娘ではない。女男爵の娘だ。そして、新たな後見人も得た。貴方達には退場していただく。」

「こ、後見人だと？あの娘に？」

父親がディアナの後見人つぶしに躍起になっていたことは既に調査済だった。

「自分の死期を悟った女男爵は、生前に彼女の後見人を探そうとした。けれど、貴方に金を詰まれて、もしくは弱みを握られた候補者たちは次から次へと辞退していったんですよね。けれどね、貴方が考える世界より、私が考える世界の方がもっと広い。彼女の後見人は、クラインハイブ侯爵夫人になりました。」

愕然とする父親。

「彼女に手出しはさせません。」

もう一度指を鳴らす。

「お引取りを。もうお会いすることもないでしょう。」

使用人達に追い出されるように部屋から出される親子。

「あ、あんな気味の悪い娘、貴族の社会に受け入れられるはずがないっ！女男爵の娘となっているとしても、平民だ。貴方のような貴族が迎えられるわけがない。」

男の叫びが屋敷に響いた。

「私には、階級など何も意味のないことなんですよ。」

静かにドアがしまった。

「いかがいたしますか？」

「あの親子、生きていけるだけの金しか残さず、ロンドンから出せ。見かけるだけで毒が出そうだ。」

「かしこまりました。」

下がるイザーク。

その数分後、部屋にディアナが入ってきた。

「やあ、どうされました。」

「あ、あの父と姉が来っていると伺って……。」

部屋の中にはライモンしかない。

「来てませんけど？」

自分の勘違いだったのかと頬が染まる。

「あ、すみませんでした。失礼します。」

「ディアナ？」

呼び止められ動きが止まる。

「はい？」

近づくライモンに少々の警戒をする彼女に彼は苦笑しながらその手を取った。

つづく

求婚

「私は貴方を愛しています。」
突然の告白。

いまでも好かれてるな、気に入られてるなと思つたことはあるけれど、からかわれてるとしか思えなかつた。

気味の悪い黒髪に金の目。

実の親にも気味悪がられた自分のことを彼女は思い出し取られた手を引き抜いた。

「ご、ご冗談を……。」

祖母も同じ容姿だつたけれど、金の目と言うよりは、縁に近かつた父親の妨害もあつたが、彼女自身の容姿のせいで就職が流れた時もあった。

（それなのに、この人は……。）

離れた手をライモンはもう一度手に取つた。

「貴方は私の輝ける月。私を惑わせ、虜にしているんですよ。」

手の平に彼の唇を感じた。

かあつと赤くなる彼女をグツと引き寄せる。

「貴方がいやなのなら爵位など捨てますが？」

ギョツとして顔を上げる。

彼は貴族の矜持と言うものを大事にしていると家の者、そしてクレアに聞いた。

そんな彼があつさりと爵位を捨てると言い切る。

「そ、そんなこと言つてはいけません！ 貴方は貴族の矜持を大切にしているのでしょうか？ あつさりとそんなことを言つてはいけません。」

「では、どうすれば、私は貴方を妻に出来ますか？」

また硬直してしまつた。

「つ、妻？」

「はい。」

誰をも魅了する笑顔だった。

「貴方は私の輝ける月。私の運命の人です。今更離れると言われてもできそうもない。けれど、貴方が私から離れるというのなら、私は貴族であることも捨て、領民も国も捨て、貴方を追いかけます。それほど、貴方が大切なのです。愛しているのですよ、ディアナ。」
さっさと自分のものにして、あの親子や多くの目から彼女を守ろうとライモンは考えていた。

時期尚早なのは分かっているが、彼女を逃がすわけには行かないのだ。

「あ、……え……？」

「貴方が私に嫁ぐ上で障害になっているものは何ですか？階級ですか？」

尋ねられて思わず頷く。

これほどの人に好きだ愛してると言われてトキメかない方が可笑しい。

有り得ないと分かっているながら、彼と一緒にいる自分を想像しては打ち消した日もあった。

けれど、自分と一緒にいることで彼が酷いことを言われたり、酷い目に合わされたらと思うと胸が痛かった。

「とにかく、私は貴方を諦める訳には行かないんです。じゃないと周囲も煩いですし、何より貴方以外のご婦人には、トキメかないよ
うなので。」

虐げられた環境の中で拠り所だった祖母を亡くした彼女は強かった。世間体を考えて引き取った実父母に召使いのように扱われても不平不満も言わず勉学に励んだ。

家を出るためにはどうすればいいのかも考えていたと聞いた。

そんな強い彼女だからこそ、求めたのだ。

あの幼い時に出会った月の妖精。

ライモンは彼女との出会いを思い出していた。

つづく

月の女神

厳しくも優しい父親と明るく朗らかでいながら、全てを悟っているような母。

そんな両親の元で生まれたライモンは、小さい頃から愛されて育った。

名門シルヴァリー公爵家を次ぐ男子として生まれたからには、すべきことがあるとその教育も厳しいものだった。

特に、公爵家の子息ではなく、とある子爵家の子供として全寮制の寄宿学校に入った時は現実を知った。身分に囚われ、下級貴族と偽っている自分に対するあからさまな攻撃を加える子供いた。

そんな生活の中で唯一、仲良くしていたのが従弟にあたるジオンだったが、小さい頃はとてもよく似ていたこともあつて、あまり近くにいることはライモンにとっては好ましいものではなかった。

「クラインハイブ家の坊ちゃんと似ているからっていい気になるなよ、お前は、女王陛下の前にすら出れない下級貴族なんだ、俺たち上級貴族の言うことを聞いてればいいんだよ！」

勉強もスポーツも出来たライモンは、上級貴族を名乗っている子供達にとつては煩わしい存在だった。

言いがかりもつけられたが、優秀だったことはライモンの自信に繋がっていた。

危機回避能力というのか、何かされそうになる前に逃亡できるといふ特技も持っていた。

その日もライモンは広い敷地内を逃げていた。

「まったく、しつこいなあ……。」

今日は試験の結果が出た日だったのだが、伯爵家の子息よりもライモンは上位にいた。

それが気に入らなかつた彼は仲間とライモン狩りと称する遊びをし

始めた。

静かに教室で読書をしていたライモンは不穏な空気を感じて飛び出し、彼等が来そうもない場所を目指し、裏道を進んでいたのだ。

その場所が林ともいえる敷地内の一角にある図書館。

校舎からは随分な距離があり、放課後から寄宿舎へ入る時間までの間そこで過ごそうと思ったのだ。

そこは外部者も利用できる施設であった。

利用しているのは大体が大人の男性であったが中には女性も居た。

佇まいから彼女達が学ぶと言うことに真剣であることはライモンにも分かっていった。

沢山の本。

実家シルヴァリー家の書庫にある蔵書もかなりの数だが、さすが学校所有の図書館。

色々な系統の本を読み漁るのが趣味になっていた。

そんな図書館でライモンは1人の少女とであった。

祖母らしき夫人に連れられてやってきた彼女はキョロキョロと頭を動かしている。

金色に輝く瞳と黒い髪が印象的な少女は、嬉しそうに祖母と話をしている。

祖母に言われて座った彼女の前には分厚い本が一冊あって、その頁をめくる彼女の表情はくるくると変わってとても愛らしくライモンに見えた。

そんな折、ライモンはしつこい伯爵家子息の仲間達の姿を目にした。
(本当しつこい。こんな外部の人間のいるところで暴れたりしないだろうが、見つかる前に去ろう。)

寄宿舎に入れば、ライモンはジオンと同室のため何も言われないことが分かっていった。

ふと彼女を目に入れる。

すると伯爵家子息、ギルバートが彼女の方へと行き、本を取り上げた。

「平民の小娘がなんで、ここに入れた！」

ヤツの口の動きで言葉を讀んだ。

(彼女を救いに行きたい。)

そう思ったライモンは、立ち上がった彼女の凜とした声を聞いた。

「ここは、女王陛下の命令で多くの民に門戸を開く図書館だと何って、祖母と参りました。私が利用するのはいけないことなのでしようか。」

はつきりと言った言葉に彼は心を揺さぶられた。

緊張した顔、僅かに震える声。

相手は同じ年頃とは言え、貴族の息子達。

きつと反論するには勇気がいったらう。

「生意気なっ！」

思わず手を上げた彼に声がかかる。

司書が助けに入ったのだ。

彼は極正当な理由で彼女はここにいて良いのだと説明する。

ギルバートは恐らく知らなかったのだろう、頬を赤くして彼女から取り上げた本を机に投げ捨てた。

その投げ捨てられた本を彼女が愛しそうに拾い上げ、抱きしめる。

騒動を聞きつけた祖母がやってきて、彼女を抱きしめた。

彼女は緊張の糸が切れたのか泣き出してしまっていた。

大声ではなくとても静かに。

その姿を見たとき、ライモンは神々しい月の女神が彼女の本当の姿なのではないかと思ったほどだった。

つづく

出会い、そして。

正しいことを正しいと言う勇氣。
凜とした姿。

幼い彼女は不安や恐怖を隠しながら勇氣を出した。

助け舟を出そうと思いつながら、めんどくさいと今一步を出せなかった自分を恥じた。

次にあつた時こそ彼女の力になりたい。

家族以外に初めて抱いた思い。

いつか彼女を自分の側に。

「何？相手を見つけた？」

寄宿舎からの手紙。

5歳の時に女王陛下の前で言い切った彼。

その彼の理想。

それは月の女神。

現実主義な父親はそのことを知って愕然とした。

小さい頃に読んで聞かせたという物語。

その中に出てきた女神は、まさに男の理想というより、女性の理想という姿だった。

勇敢で、頭がよい女性。

ふと隣で微笑みながら手紙を読んでいる妻を見る。

そう、見た目こそ可憐で大人しそうに見える彼女は、芯が強く、頭の良い女性だ。

そんな母親からの愛情を受けて育った息子は、理想が高いのだろう。5歳でそんなことを言い切った息子が理想の乙女を見つけるまでにかかった年月は3年。

まだまだ子供だと言うのに人より早く大人になっていく息子。

それを淋しいと思いながらも父は頼もしさも感じていた。

「ええ、黒髪に金色の瞳をした可愛らしいお嬢さんですって。」

「貴族かい？」

文面を目で追う妻は、ふうつとため息を漏らした。

「違うみたい。」

「そうか、それは苦勞しそうだな。」

夫の言葉に妻はコロコロと笑った。

「あの子、貴方に似てちよつと強引なところがあるから、どんな手を使っても探し出して手元に置きそうね。」

視線を天に向けた後、夫は妻を見た。

「私は強引かね？」

「ええ、この私をモノにしたんですもの。強引だったのではなくて？」

出会いからプロポーズ、そして結婚までの道のりを思い出す夫婦。

身分も何もかもお似合いとされていた二人であったが、出会いは最悪だった。

女王陛下の命令のような婚姻。

お互いが素直な気持ちで結婚を決意したのは結婚式の後だった。

「あの時はお互い、素直じゃなかったからね、君には辛い思いをさせた。」

ちゅつとコメカミにキスをされ、妻は体を竦めた。

「そうね、でもライモンは、私に似て人の気持ちもよく理解する優しい子だから、きつと相手のお嬢さんも好きになってくれるはずよ。」

「おやおや私は優しくないのかい？」

ふふつと妻は笑う。

「信用してくれるまでは冷たい人でしょ？でも、その冷たさに私は優しさが紛れてることに気付いたわ。だから、貴方の奥さんになったのよ。」

口付けをかわす夫婦。

側に仕えていた家令は、そつと部屋を出て行つた。

それからのライモンは、自分の周りに居る者にもハッキリと自分の意志を伝えていた。

彼女を見つけるまでは本気の恋は有り得ない。

社交界での出会いは、遊び、戯れ以外、何物でもない。

親友のジオンと共にいれば自分も派手な女性遍歴になりそうだとわかつたのは、思春期頃。

女つたらしなんて、きつと彼女は好きではないだろう。

そう思い、かなり慎重な付き合いしかしてこなかつた。

そんな彼がやつと彼女を見つけ、手に入れたのだ。

「貴方のことは私が一生をかけて守ります。だから、私を愛して？
ディアナ。」

甘い囁き。

慣れていない初心な彼女は彼のテリトリーから逃れることはできなかつた。

t u d u k u

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340t/>

運命の人

2011年8月29日02時06分発行